

[小説] 出来すぎるぼくに出来ないこと

文学部卒 氷川真紗兎

● アウトライン

成績優秀、スポーツ万能、ルックスも性格も完璧。そんな“出来すぎる”男がふられた理由は「あなたはひとりでなんでもできるでしょ」。そして最愛の彼女は、優しさだけが取り柄の彼を選んだ……。

映画『STAND BY ME ドラえもん』からイメージ想起しました。のび太×しずかの結婚前夜、幼なじみの男連中でのバachelorパーティーで、酔っぱらった出木杉が洩らした衝撃の失恋理由。

賛否両論あるかと思いますが、映画『STAND BY ME ドラえもん』やCMでおなじみの『TOYOTOWN』のノリで読んでいただけたら嬉しいです。

● [小説] 出来すぎるぼくに出来ないこと／著：氷川真紗兎

ずっと好きだった。

この想いが報われる可能性は低い、と、いつからか気付いていた。たおやかな外見に似ず男前でハッキリとした彼女は、ぼくに勘違いさえさせてはくれなかった。彼女にとって「いいお友達」とは、文字どおりの意味でしかない。「いいお友達」以上の人物は、最初から、彼ひとりなのだ。

件の彼と、半年ほど前、たまたま連絡を取る機会があった。せっかくだからと、互いに予定を都合し、一緒に飲みに行った。彼は、妙に酒が進む様子だった。気になって話を促すと、誰にも言わないでほしいと口止めされた。

「実は、彼女にプロポーズしたんだ」

でも答えを保留されている、と彼は不安の酒をあおった。すでにアルコールが回っていたようだから、彼は、ぼくの顔色の変化には気付かなかっただろう。ぼくは、ざあっと音を立てて顔から血の気が引くのを感じていた。

適当な用件を理由に彼女をランチに誘ったのは、彼と飲んだ翌々日だ。明るい店内で落ち合った。世間話もそこそこに、ぼくは彼女を見つめ、震える声を絞り出した。

好きだ、と告げた。きみを幸せにしたい、と告げた。

彼女は、ぼくへの答えは、保留になどしなかった。キッパリと断られた。わたしは彼のことが好きだから、と。

なぜ、と食い下がったぼくは、たぶん見苦しかった。彼女の答えは、残酷だった。「あなたはひとりでなんでもできるでしょ」

優しさだけが取り柄の彼を選ぶ彼女だからこそ、器用なだけが取り柄のぼくを、つまらない男だと感じるんだろう。

そう、と笑ってお茶を濁すしかなかった。変なことを言ってごめんね、彼とお幸せに、と。めまいを覚えながらも、平気なふりをした。こんなふうだから、ぼくは、彼女にふられたんだ。泣いて取り乱して、強引に彼女を奪ってしまえたなら、どんなによかっただろう。

保留されていたプロポーズの答えがOKだった、と彼から連絡が入った日。おめでとう、と返信したぼくは、生まれて初めて、やけ酒に溺れた。

彼の独身生活最後の夜を記念して、仲間たちと一緒に騒いで過ごした。のろける彼は、普段どおり、真っ先に寝てしまった。

起業して実家の資産を拡大したガキ大将と、実家を飛び出してデザイナーの才を発揮する元お坊っちゃまと、ロボット工学の研究に身を投じるぼくと。三人で、ぼくの身も蓋もない失恋話を肴に、一升瓶なんか、あっという間に空っぽになった。

よく晴れた結婚式当日は、十数年ぶりに再会した小学校時代の恩師も交えて、明け方まで飲んだ。いや、完全に、酒に飲まれた。気高くも清楚で、聖母のように美しい花嫁のデジタル写真を見返しながらか、ぼくは酔いつぶれた。

「ひとりでなんでもできる」だなんて。自分の器用さを上手に活かして、そつのない紳士を演じてきたのは、彼女のため。ぼくはただ、彼女に認めてもらいたかっただけなのに。

それとも、彼女は、ぼくという人間の浅はかさを見抜いているのか。きっとそうに違いない。

彼女が選んだ彼は、誰よりも優しく、思いやり深い。ぼくは、親切な気配りはできても、性根は決して優しくない。

起業して成功したガキ大将は、義理堅い人情家だ。ぼくは、人当たりのいいふりをしているけど、義理や人情では生きていけない。

元お坊っちゃまは、勘当同然に家出してまで自分の才を信じた。ぼくは、勉強やスポーツは得意でも、天賦の才なんて持たない。

なんでもこなせるように見えて、本当は、ぼくは誰にもかなわない。

だから、彼女はぼくを選ばず、彼を選んだ。賢い選択だと、祝福を贈るよ。本当に、おめでとう。

「何時だと思っておられるのですか？」

色の薄い金髪をひつつめにした同僚の女史は、ぼくを見るなり、眉間にしわを刻んだ。ただでさえ冷淡な灰色の瞳が、ますます温度をなくす。

ひと眠りして、どうにか酔いは引いた。ただ、ぼくの体は、まぎれもないアルコール臭を発している。頭痛がする。ぼくは、酒焼けした声で、女史に抗議した。

「午前中は遅れて出勤します、と連絡さし上げたはずです」

「すでに午後になっています。午前中は出勤しない、午後に出勤する、と、正確におっしゃってください」

「……申し訳ありません」

人工知能の開発において優秀な研究者である女史は、堅物で几帳面で、融通が利かない。女史自身が高性能な人工知能を積んだロボットなんじゃないか、という噂もあるくらいだ。

一緒に研究室に詰めているぶんには、女史の機能的な冷徹さも気にならない。むしろ、ありがたい。人工知能を使った思考実験と解析では、人間的情緒を至上としていては、結果を読み誤ってしまう。でも、同僚としてどうかと問われれば、ハッキリ言えないぼくには、笑ってごまかすしかすべがない。

「連絡の不達だけでなく、お酒の匂いまでぷんぷんさせて、だらしないですよ」

「だらしない、ですか」

取り立てて甲高いわけでもない女史の声が、ぼくの脳を不快に引っ掻いた。だらしないなんて、生まれてこのかた、言われたことがない。

「ご友人の結婚式でしたっけ。ずいぶんと羽目を外されたようですね」

「新郎も新婦も、昔からの馴染みなんです。久しぶりに会う知人も多く出席していて、思い出話に花が咲きました」

「だからといって、仕事に支障の出るほど飲酒なさるとは、非常識ではありませんか？」

「申し訳ありません。今後は二度と、こうしたことを起こさないように心がけますので」

こんな情けない失恋は、二度とあってほしくない。半年前の彼女の言葉が、まだぼくの頭の中で、痛みを発して鳴り響いている——あなたはひとりでなんでもできるでしょ。

女史は、神経質そうに、灰色の目を細めた。

「ええ、ご自覚ください。TED xでドリーミィを披露するまでに、もう日がないの

ですよ」

TED xとは、広めるべき価値のある知識を発信するためのスピーチとパフォーマンスの場だ。テクノロジーとエンターテインメントとデザインを中心とした幅広い分野から、多角的な提言がされる。

来月開催されるTED xでは、ロボット工学が一つの柱となっている。女史とぼくが中心となって進めている人工知能「D r e -M n」、通称ドリーミィも、そこでお披露目される予定だ。

「スピーチの内容もドリーミィのパフォーマンスも、大枠は決まっていますでしょう？」

「枠を定めたただけでご満足ですか？ 博士、あなたにも向上心を持っていただかなくては困ります。ドリーミィの潜在能力は、もっと高いのですよ」

「ですが、TED xの要項やレジュメは提出済みです。今さら変更なんて……」

「決められたプログラムをこなすだけならば、人工知能でなくとも可能です。ドリーミィには、学習と推測、という能力があります」

「……ええ」

「ドリーミィは、つねに、もっと能力を発揮したいと望んでいます。レジュメの枠などに収めてしまっただけでは、その学習を妨げることになります。それがどれほどドリーミィのストレスとなるか、博士はご存知ですよ」

叱咤にも似た口調に、ぼくは酒臭いため息をついた。女史にとっては、同僚の異常事態よりも、ドリーミィのほうがはるかに重要で価値があるのだ。ドリーミィに対する優しさの、せめて十パーセントでも、ぼくに向けてくれてもよさそうなものだが。なんて考えてしまうぼくは、よほど疲れている。同時に抱えた祝福と失望が、心の許容量をオーバーしてしまっている。

お言葉ですが、と、ぼくの舌が勝手に動いた。我知らず、皮肉な笑みに口元が歪んでいる。

「向上心だ潜在能力だと、人間の勝手な期待をドリーミィに押しつけ続けるのは、どうでしょうね？」

「何をおっしゃるの。それでは、あなた……」

「目を見て会話をする、いないいないばあをする、だるまさんがころんだをする。隠れる範囲が狭ければ、かくれんぼの鬼もできる。パフォーマンスとしては、十分でしょう。これ以上を課したところで、うまくいくという保証はどこにもありません。それに……」

言い募ろうとしたぼくは、女史の人差し指に唇をふさがれ、息を呑んだ。細い指は、ひんやりとしていた。

「おやめなさい。ドリーミィが聞いたら、傷付いてしまいます」

多数の繊細なギアが噛み合う音を立てながら、ゆっくりと、ドリーミィが歩いてくる。二足歩行だ。きちんと膝を曲げて、上体を起こして、確かめるような一步一步を踏み出してくる。軽量で柔軟な有機デバイスを多用したボディは、丸みのある構造だ。当初は白を基調にデザインされていたけれど、ぼくの提案で、青空色にモデルチェンジした。

ドリーミィは、女史の隣で足を止めた。百三十センチに満たない身長から、小柄な女史を見上げる。

《女史、問題は、解決しましたか？》

しゃべり方は、まだ、抑揚に乏しい。発音はなめらかになってきた。ドリーミィは、聞いた言葉をおうむ返しにすることができる。おうむ返しという機能によって、人間的な発声や発音を学習することができる。

「ひとつの問題は解決したわ、ドリーミィ。このとおり、博士は出勤してきたの」

《はい、女史。ですが、もうひとつの問題は、依然、解決していませんね》

ドリーミィは、ぼくの正面に回り込んだ。強化ガラスで覆われたつぶらなカメラアイが、ぼくを見上げる。ドリーミィと視線を合わせていると、ときどき遠近感を奪われる。疼痛する頭をかばいながら、ぼくは足を踏み替え、体のバランスを保った。ぎこちなく微笑む。

「遅くなってすまない、ドリーミィ。いい子にしていたかい？」

《はい、博士。午前中は、博士の言っていたとおり、TEDxの、パフォーマンスの練習を、していました》

「そう。調子はいいい？」

《はい、博士。私は、問題、ありません。ですが、博士には、問題が、ありますね》
ぼくは小首をかしげた。

「ぼくに、問題？」

《はい、博士。私が、博士の問題に、気が付いたのは、百九十二日前です》

ドリーミィは、ウィィと、かすかな駆動音とともに小首をかしげた。ぼくとそっくり同じ角度だ。いつの間にか、こんなどうでもよい癖を学習してしまったらしい。
《百九十二日前、つまり、半年ほど前から、博士は、ときどき、心拍数が下がり、瞳孔が狭まり、顔面の血色が悪くなります》

どきりとした。ドリーミィは、対話する相手の「顔色をうかがう」ことができる。相手の感情を読みながら対話できるよう、視覚や聴覚を用いた医療的センサを備えているのだ。

《半年ほど前の、三十日間ほどは、頻繁に、そのような現象が、博士に起こっていました。三十日間ほどを過ぎると、現象は、やや緩和されました》

「……ぼくの様子を記録していたの？」

《はい、博士。そして、現象は、三十日ほど前から、再び、顕著になり、三日前から、特に、顕著になりました》

「ドリーミィ……」

《現象について、女史から、適切な言葉を、教わりました。博士は「元気がない」のです。それは、非常に、問題が、あります》

女史は、表情ひとつ変えず、抑揚に乏しい口調で言った。

「ドリーミィは、人間以上に丁寧に、人間の様子を見ています。あなたの元気がないだなんて、ドリーミィに言われるまで、わたしを含む誰もが気づきませんでした」

ああ、と、ぼくは嘆息した。では、半年前から、みんなが薄々ぼくの失恋を察していたのか。

ドリーミィのカメラアイが、内蔵されたLEDをパチパチと点滅させた。まるで、驚きのあまり目をしばたかせるように。

《現在の博士の呼気は、アルコール濃度が、非常に高いです。飲んだくれの二日酔い、ですか？》

「飲んだくれや二日酔いだなんて単語、誰から教わったんだい？」

《女史が読んでくれた小説に、書かれていました。現在の博士に、使って、正解ですか？》

正解よ、と女史が言った。女史の声音は、明らかに、ぼくに接するときよりも柔らかい。

ぼくは口を開き、言葉を探し、言葉を見付けられず、自分の酒臭さを思って口を手で覆った。ドリーミィは、小首をかしげたまま、ぼくの様子を観察していた。不意に恐ろしくなる。ドリーミィには、嘘はもちろん、見栄も虚勢も通用しない。器用で紳士的なぼくの仮面なんて、とっくに見透かされているのだ。

と。ドリーミィが、カメラアイのLEDを、小刻みにチラチラと輝かせた。この発光パターンは「緊張」だ。複雑なパフォーマンスの前には、このパターンを示すことが多い。

《博士、見ていてください》

ドリーミィは、腹部に取り付けられた白いポケットに、丸っこいフォルムの両手を突っ込んだ。ポケットは、ドリーミィがぼくの白衣のポケットに興味を示したから、プレゼントしてあげた。歩行時のバランスに配慮すると、腰の左右ではなく、腹部正

面に付けるのがベターだった。

ドリーミィは、ポケットから、ボールをふたつ取り出した。テニスボールほどのサイズだ。質感から推し量るに、シリコン製だろう。ドリーミィは、両手にひとつずつ、ボールを持った。小刻みにチラチラと、ドリーミィの目が輝いた。

ドリーミィの右手が、次いで左手が、ボールを宙に放った。ボールは、ともに、放物線を描いた。右から左へ、左から右へ、タイミングをずらした左右対称の軌道。ドリーミィの右手が、次いで左手が、ボールを受け止めた。

一往復の軌道では、意味がわからなかった。ドリーミィは繰り返した。二往復、三往復と、ボールが宙を舞う。同じ高さ、同じ軌道で、トスとキャッチが続いていく。

「お手玉……？」

ドリーミィは、両手がボールをつかんだタイミングで、首を左右に振った。

《いいえ、博士。ジャグリングです。私は、ピエロに、なろうとしています》

「ピエロ？ なぜ？」

《博士が、元気がない、からです》

「え？」

ドリーミィは、ひたむきな青い光を、カメラアイの奥にともした。

《間違いがあったら、指摘、してください。元気がない、のは、問題が、あります。ですが、人間は、元気を出す、ことができます》

「うん、そうだね」

《元気を出す、ためには、楽しいことが、あればよろしいです。楽しいことは、何ですか？ 女史に、尋ねました》

女史は、ドリーミィの頭に、そっと手を乗せた。小さな手は、思いがけず、壊れやすそうに柔らかな形をしていた。

《女史は、私と一緒に、考えて、くれました。そして、教えて、くれました。ピエロは、とても、楽しいことをします》

「だから、ドリーミィは、ピエロのようにジャグリングをしようと考えた？」

《はい、博士。私は、正解ですか？》

ぼくが何かを言うより先に、女史が口を挟んだ。

「ふたつのボールを交互にトスし、キャッチする。ドリーミィがこれをできるようになるまでに、一ヶ月以上かかっているのですよ」

「一ヶ月以上も？」

「ボールを投げる高さや方向を一定にするために、どの程度の大きさの力を発揮すれ

ばいいのか。人間ならば無意識に調整し、習得できる動作です。でも、ドリーミィは違う」

ドリーミィは、少し顔を伏せた。はにかむ仕草に見えたけれど、そんな繊細な感情は、まだブレイクスルーに達していないはずだ。ドリーミィが再びぼくを見上げた。

《ボールを、正確にトスするために、両手の圧力センサで、物体の質量を、測定することを、覚えました。物体の質量が、わからないうちは、力が加わりすぎて、ボールが破れました》

「そう。大変だったね」

《私は、まだ、ふたつだけのボールを、トスしてキャッチします。もっと、たくさんのボールを、トスしてキャッチしたい、です》

「いいね。それはきっと、楽しいよ」

ドリーミィの両目の光が、ハッキリと細められた。人間の微笑に似せた発光パターンは、ドリーミィが最初に習得した表情だ。

《私が、たくさんのボールを、トスしてキャッチしたら、たくさんの楽しいことが、あります。博士は、たくさんの元気を出します。だから、私は、ジャグリングを、練習します》

ぼくは一言だけささやいた。

「ありがとう……」

胸が詰まって、後は何も言えない。ただ、ドリーミィを抱きしめた。有機素材を駆使したボディは柔らかく、駆動する機械の熱は人間の体温にも似ている。ドリーミィが、ボールを持ったままの腕を、おずおずと、ぼくの腰に回した。

《博士は、血液が、腹部に集中し、全身の血流が、悪くなっています。二日酔いは、体の重心が、安定しないのですね？》

ドリーミィは賢い。でも、まだまだとんちんかんなことを言う。ぼくは、くすりと笑った。

「大丈夫。ドリーミィを支えにしなきゃ倒れるほど具合が悪いわけではないよ」

《そうですか》

「ドリーミィを抱きしめたのはね、嬉しいからだ。親愛の表現だよ」

ぼくの腕の中で、ドリーミィが小首をかしげた。戸惑っているんだ。いや、問題ない。ドリーミィは、必ず学習する。

ぼくは女史を見た。女史はドリーミィに優しいまなざしを注ぎ、そのついでに、ぼくにもかすかな微笑みをくれた。

不意に、彼女の言葉が脳裏によみがえった——あなたはひとりでなんでもできるで

しよ。

できないよ、と。ぼくは胸の内側で、半年前の彼女に、かぶりを振ってみせる。

きみに告げたい。きみは間違っていた。小器用なぼくにも、ひとりじゃできないことは、あるよ。未熟な人工知能が示してくれるとおりで。楽しいことは、ひとりじゃできない。

ぼくは今、拙く柔らかなロボットを抱きしめて、冷静で有能な同僚に見守られている。ぼくは、ひとりなんかじゃない。だから、なんでもできる。

「おめでとう……」

ぼくはつぶやいた。彼と彼女の結婚を、初めて、心から祝福できた瞬間だった。

——fin.——

● あとがきもどき

『出来すぎるぼくに出来ないこと』をお読みいただき、ありがとうございました。

本作は、ケータイ小説を無料公開するサイト「Berry's cafe」でもお読みいただけます。こちらは、スマホやケータイでの表示に合うよう、余白の多いレイアウトにしています。

京大F同の初期メンバーのひとりでもある氷川真紗兎〔ヒカワサト〕は、【電子書籍×恋愛小説 for adults】をコンセプトに執筆する作家です。Kindleストアや電子書店パピレスなど各種の電子書で短編小説を商業配信しています。



マ
す
店



寒月街の飾り窓——氷川真紗兎 WEB SITE——

<http://hikawa-masato.webnode.jp/>